



大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭における前庭と敷地配置の空間構成-内と外をつなぐ空間の研究

山口, 秀文

(Citation)

日本建築学会計画系論文集, 75(654):1907-1916

(Issue Date)

2010-08

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001623>

大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭における前庭と敷地配置の空間構成 - 内と外をつなぐ空間の研究 -

SPATIAL STRUCTURE OF THE FRONT GARDEN AND SITE ARRANGEMENT
IN HONBOU AND TACCHU OF DAITOKUJI TEMPLE AND MYOSHINJI TEMPLE
- Study on the space connecting the interior and exterior -

山口秀文*

Hidefumi YAMAGUCHI

This paper's aim is a clarification of spatial composition of site arrangements with a viewpoint of relationship between gardens and buildings. I pick up Daitokuji temple and Myoshinji temple. Through a typological analysis, I point out some results as follows; 1) There are six types of site arrangement on "Honbou" and "Tacchu". 2) Board fences and buildings of "Kyakuden" and "Kuri" compose front gardens. 3) Every site arrangement of "Honbou" and "Tacchu" consist of six elements. 4) Spatial arrangements of gardens make adjustments and correlation between the intrinsic factor and extrinsic one.

Keywords: Spatial Structure, Site Arrangement, Front Garden, Daitokuji Temple, Myoshinji Temple

空間構成, 敷地配置, 前庭, 大徳寺, 妙心寺

1. 研究の背景と目的

本研究は、「敷地」を建築の内部空間と外部空間との関係からみたデザイン・計画に関する基礎的研究である。本稿では、敷地内の外部空間を単なる空地とは捉えずに、「庭」という人々の生活に関連し文化的意味をもつ概念としてとらえる。

一方、一つ一つの敷地における建築と庭の関係は、敷地内だけに関係するのではなく、敷地の外、すなわち、街や都市とも大きく関係している。この「敷地」と都市やまちとの関係について、今は村から町、郊外住宅地への変遷を地割りと家との関係から述べ、町や村の変化をその集合のあり方とそれに応じた敷地の中の家屋の配置から説明している¹⁾。重村はこのような単位と集合の関係、都市と建築とのあり方について「プロトコル」という概念（「単位に内在する上位と接続する形式=規定」）を用い、幕末の江戸や日本の町家、パリの中庭を囲む建築群（アパルトマン）を例に、「プロトコルが町並みをつくり出し」ていたことを示している²⁾⁽³⁾。また、山田は、陣内とリンチを引用・参照^{注1)}し、「『敷地』という空間単位を基本的な研究の枠組みとして設定」し、景観について論じている^{注1)}。

これらに示される単位としての「敷地」について、リンチが「敷地計画とは、建築やその他の構築物を互いに調和するように配置する技法である。」⁵⁾と述べているように、敷地内の建築・庭の配置のあり方が都市やまちと建築を結びつけ、「互いに調和」させるのである。

このように、敷地という空間単位、敷地内の建築の配置の重要性、

それらがある秩序をもつことにより調和が生まれることが指摘されている。

次に、本稿での庭、建築と庭、敷地についての捉え方を改めて述べる。

建築、庭、敷地の関係を、庭を中心に4つの方向から捉え、図1に示す。「(1) 間取り（建築）と庭の関係」とは、建築の間取り、内部の空間と庭との関係である。「(2) 庭そのもの」とは、敷地内で展開する庭そのものの空間や機能・意味である。「(3) 庭と敷地外の関係」とは、敷地外、すなわち隣地や街路、地区との関係をいう。「(4) 敷地内の建築と庭の配置」とは、上記3点を総合した上での敷地内部での建築と庭の関係や配置を扱う視点である。

また、建築と敷地という点からこれら三者の関係をみると、建築

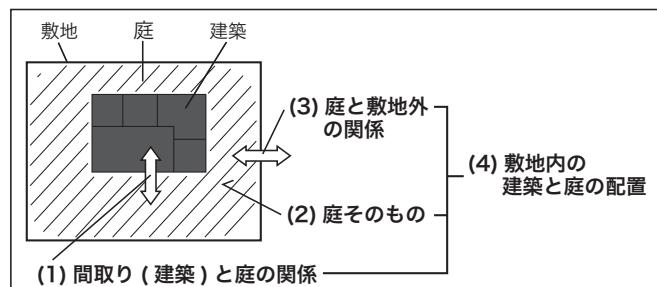


図1 建築・庭・敷地に対する4つの視点

* 神戸大学大学院工学研究科 助手・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

そのものの機能や役割等に基づく平面や配置といった内的要因と、敷地がもつ都市的な制約条件としての敷地規模や形状、接道等のアプローチといった外的要因を空間的に関係づけ取りまとめているものが敷地内部の庭のデザインであると考える。

以上より、敷地内の建築と庭のあり方に関する一つの基礎的研究として、大徳寺・妙心寺の空間を取り上げ（選定理由は後述）、建築・庭・敷地に着目し、外的要因と内的要因との関係からその前庭と敷地配置の空間構成を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2-1. 研究の位置づけ

大徳寺・妙心寺は、伝統的な日本建築・庭園を有し、文化財としての意味からも日本建築史・庭園史において膨大な研究がなされている^{注2)}。一方、建築・都市デザインの分野においても研究されている。都市デザイン研究体による大徳寺・妙心寺を多くの塔頭が集合した一つの都市空間と見立てた都市空間・都市デザインの研究¹⁸⁾、川崎清らによるシークンス分析を通した寺院のアプローチ空間(前庭)の研究¹⁹⁾がある。これらには建築と庭からなる「敷地」という単位とその内部の構成という視点ではなく、この点が本研究と異なる点であり、意義ある点である。

また、西澤文隆による建築と庭の関係に関する一連の研究^{注3)}もある。これは、「実測」を通して建築と庭の有り様を「敷地」単位、時には周辺環境も含めたものとして記述し解き明かしている。本研究では、その「実測図」を分析のベースにしている。本研究は、その建築と庭の有り様を「実測図」という生の情報をもとに、大徳寺妙心寺の44の本坊塔頭を対象にその空間とその構成を、建築と庭に着目し外的要因と内的要因からモデル的な図化を通して明らかにする点で意義がある。

2-2. 研究対象事例の選定と概要

上述の既往研究にも述べられているように大徳寺・妙心寺の空間は、塔頭群の集合体としての都市空間、建築と庭の高密な関係、一定の規律の中にある多様性、前庭のもつ多様性と都市空間、住み続けられていく中で造られた空間（住空間の集合体）という特徴を有していると捉える。

禅宗寺院の塔頭は、宗教空間でもあるが居住空間^{注5)}としての性格ももち、良好な建築と庭の関係、まち並みを構成する上で重要な役割を果たすと考えられる前庭が発達している。各塔頭では、一度に多くの建物と庭が創られたのではなく、主な建築である客殿と庫裏が建てられ、庭が造られて、その後、徐々に必要に応じて建築と庭が造られていった^{注6)}。さらに、代々住む和尚や庭師などの多くの知識人や名人によって担われたのである^{注6)}。このような特徴を有する禅宗寺院として大徳寺・妙心寺を取り上げる（図2）。

2-3. 研究の方法

研究の方法は以下である。

- (1) 上記のような特徴をもつ大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭の配置形式を内的要因である客殿・庫裏の配置と外的要因であるアプローチから類型的に整理し、その特徴を明らかにするとともに典型例を抽出する。

(2) 配置形式と外的要因である敷地規模・形状との関係から整理し、
(1) と合わせて、配置形式と外的要因との関係を明らかにする。

(3) 典型事例について、西澤文隆・重森三玲の実測図^{注9)}と観察調査により建築と庭、つまり、内的要因と外的要因との関係から前庭の空間構成、及び、本坊・塔頭^{注5)}の建築と庭の配置構成を方丈・客殿・庫裏、書院、前庭を中心に明らかにする。

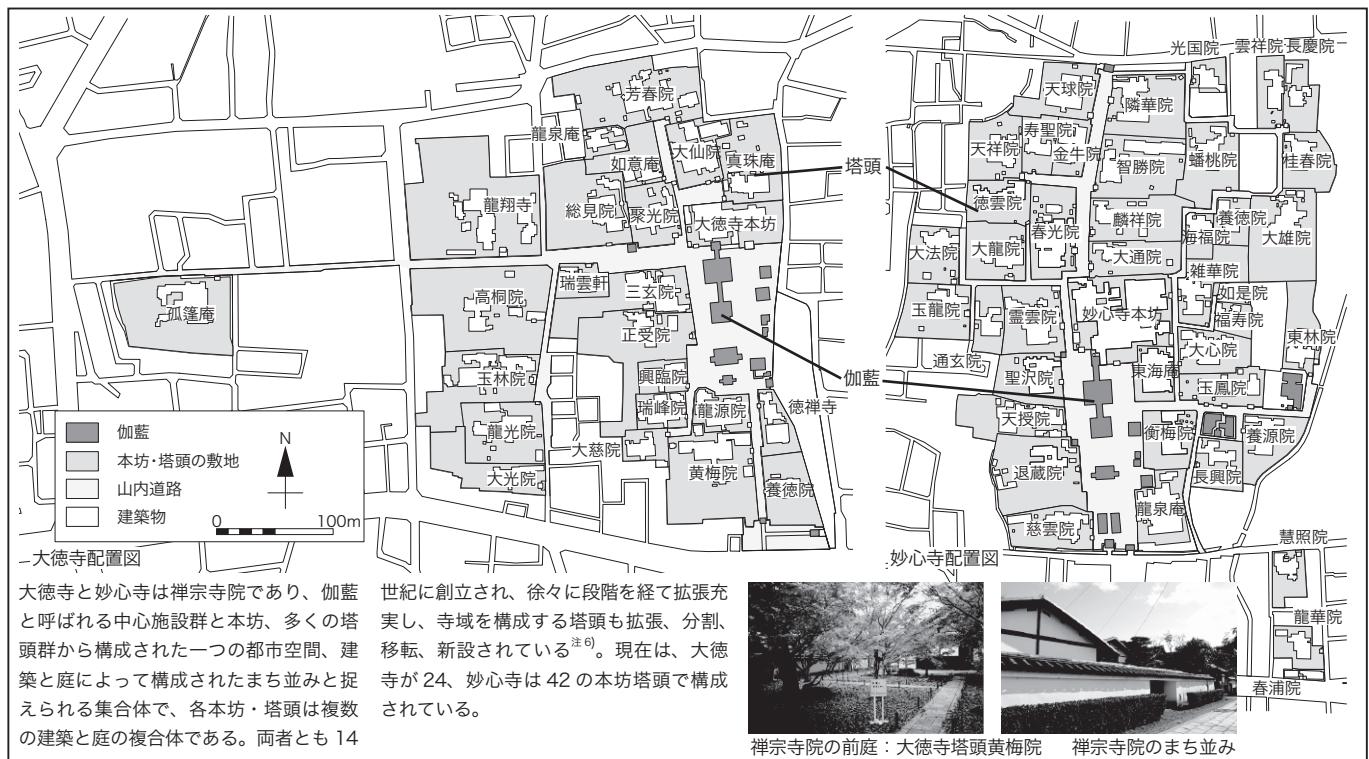


図2 大徳寺・妙心寺の概要

3. 本坊・塔頭の配置形式

本章では、本坊・塔頭の配置形式を内的要因としての客殿・庫裏の配置と、外的要因としてのアプローチから類型的に整理し、その特徴を明らかにするとともに典型例を抽出する。対象となる本坊・塔頭は、表1に示す標準型の44である。本稿で用いる図、記号、配置形式の記載例を図3に示す。

3-1. 本坊・塔頭の配置形式

大徳寺は本坊と23の塔頭と明治になって有栖川宮の離宮の建物を移築したものである瑞雲軒、妙心寺は本坊と伽藍として扱われている玉鳳院と40の塔頭が集まって寺域を成している(図2)。本坊・塔頭の主たる構成要素は建築と庭の両者を併せて考えると客殿、庫裏、書院、前庭がある。方丈・客殿は本坊・塔頭の中心的建物であり、本尊仏・開山頂相を奉るための建物、庫裏は実務を行うための建物である。

本坊・塔頭の二大要素である客殿と庫裏の配置を考える上での条件としては、「客殿は南面させなければならない」「玄関は南広縁の東端か西端に附く」「客殿と庫裏は渡廊下で結ばれる」の三つがある⁸⁹⁾。これらから、図3で示す記号例に従って、建物の配置形式を求める。

「客殿と庫裏の配置関係(東西配置と南北配置)」と「庫裏の棟方向」より「a)建物の配置形式」が4種(図4横軸I~IV型)と「b)庫裏に対する表門からのアプローチの方向」(図4縦軸)を合わせると「配置基本形式」が8種求められる(図4)。それぞれを図4に示すように「I平行型」「I直交型」等と呼ぶ。

3-2. 配置形式による本坊・塔頭の類型

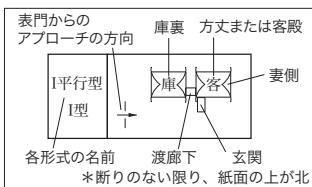
この配置基本形式には、44の標準型のうち42が該当する^{注7)}。残りの2本坊・塔頭は、妙心寺本坊と大心院であり、両者ともに北西-南東に方丈・庫裏を配する形のため別に扱う。

I直交型には大徳寺本坊と東林院しか該当していない。大徳寺本

表1 大徳寺・妙心寺の塔頭数

	標準型	一体型	その他	計
大徳寺	19	0	5	24
妙心寺	25	15	2	42
計	44	15	7	66

標準型：客殿・庫裏両者をもつもの
一体型：客殿と庫裏の機能を併せた一棟の建物をもつもの
その他：標準型、一体型に当てはまらないもの



a) 建物の配置形式：
客殿と庫裏の配置関係「東西配置」「南北配置」と「庫裏の棟方向」の組合せにより4種(図4横軸のI~IV型)
b) 庫裏に対する表門からのアプローチの方向：
庫裏の棟に平行、直交

図3 配置形式記載例：東西配置、I平行型の例

	I型	II型	III型	IV型
庫裏の棟に平行	龍源院 大光院 義徳院(大) 黄梅院 退藏院 大慈院	聚光院 芳春院 玉鳳院 大仙院 二玄院 総見院 寿聖院 大龍院	德禪寺 春光院 養源院 隆華院 衡梅院 緋華院 桂春院 高禪院 東海庵 聖沢院 靈雲院 慈雲院 龍泉庵(妙)	該当無し
庫裏の棟に直交	大徳寺本坊 東林院	真珠庵 如意庵 興臨院 龍翔寺 天授院 龍祥院 金牛院 瑞峰院	孤篷庵 大雄院 德雲院 蟠桃院	該当無し

図4 本坊・塔頭の配置基本形式

坊は、本坊という特殊性を持つため、妙心寺本坊、大心院と合わせて「特殊型」とする。また、東林院は、通常庫裏の妻側にある入口が平側にあるため、その点を考慮し、「II平行型」とする。IV平行型、IV直交型に該当するものはなかった。

これらにより、44の本坊・塔頭の配置形式を表2のように、「特殊型」、「I平行型」「II平行型」「II直交型」「III平行型」「III直交型」の6類型に分類できた。

3-3. 外的要因としてのアプローチの位置と配置形式

図5は6類型の配置形式の内、特殊型を除くI平行型、II平行型、II直交型、III平行型、III直交型(合計41塔頭)の「c)アプローチの位置」(横軸の6種)について、該当する塔頭を当てはめたものである。

I平行型は、東西アプローチで庫裏手前と庫裏正面の二つのアプローチの位置が典型的である。

II平行型は、客殿庫裏間に位置するものが多くを占め典型的といえる。後述するIII直交型の特徴から南側からのアプローチをもつ塔頭の典型でもある。

II直交型は、東西アプローチで庫裏手前が多くを占め典型的であるといえる。

III平行型も東西アプローチで庫裏正面、客殿庫裏間、客殿正面がほとんどを占め、特に客殿庫裏間が典型的であるといえる。

上記4類型では、客殿の入口である玄関と妻側に位置する庫裏入口の両者に近い位置にアプローチが位置している。しかし、最後のIII直交型は、客殿もしくは庫裏のどちらか一方が遠くなる位置にしかアプローチをもってこざるを得ない。客殿手前の2例は南側を主にしつつも北側にもアプローチがあり、庫裏手前の2例とも合わせると北側にアプローチをとる場合に選択された配置形式であり、しかも、4例と少ないとことから、出来れば避けようとした配置形式であり、アプローチの位置の制約が大きい場合にのみ選択されたものであると考えられる。

このように外的要因としてのアプローチの位置と配置形式の関係を以下の4点に整理できる。①玄関と庫裏入口両者に近い位置にアプローチが位置する配置形式をとる。②東西アプローチの場合はI平行型、II直交型、III平行型となる。③南アプローチの場合は、II平行型をとる。④北側からのアプローチを取らなければならないという場合にのみIII直交型となる。

4. 本坊・塔頭の敷地規模・形状と配置形式

本章では、塔頭の敷地規模・形状という外的要因と配置形式との関係を分析・考察する。

表2に配置形式、敷地面積^{注8)}、東西方向の敷地幅(Lew)^{注8)}、南北方向の敷地幅(Lsn)^{注8)}、アプローチの位置を一覧として示している。図6は、それらの値から敷地規模・形状と配置形式の関係を散布図として示したものである。縦軸に敷地の南北方向の最大距離(南北方向の敷地幅Lsn)を、横軸に同じく東西方向(東西方向の敷地幅Lew)をとっている。各点は、配置形式、敷地形状、表門の位置を示している。各本坊・塔頭の

表2 本坊塔頭の配置形式一覧

配置形式	No.	塔頭名	アプローチ	表門位置	敷地面積	Lew	Lsn	備考
特殊型	1	大徳寺	大徳寺本坊	南	庫裏手前	3002	85.20	37.69 本坊
	2	妙心寺	妙心寺本坊	南		5945	89.96	77.70 本坊
	3	妙心寺	大心院	西		2187	63.16	41.67
I 平行型	4	大徳寺	龍源院	東	庫裏手前	1589	49.92	40.20
	5	大徳寺	大光院	東	庫裏手前	2776	98.32	61.34
	6	大徳寺	養徳院	西	庫裏正面	2505	47.66	65.78
	7	妙心寺	退藏院	東	庫裏正面	4725	81.07	72.39
	8	大徳寺	黄梅院	東	庫裏正面	5732	78.32	92.44
	9	大徳寺	大慈院	東	庫裏後	1102	39.50	33.03 袋小路
	10	大徳寺	聚光院	南	庫裏手前	2189	45.58	54.81
	11	大徳寺	芳春院	南	庫裏手前	5787	126.78	61.83 袋小路
	12	妙心寺	玉鳳院	南	庫裏正面	2056	73.85	35.92
II 平行型	13	妙心寺	東林院	南	庫裏正面	2111	33.60	80.68
	14	妙心寺	寿聖院	南	客殿庫裏間	1405	31.34	51.55
	15	大徳寺	大仙院	南	客殿庫裏間	2394	54.78	56.68 袋小路
	16	妙心寺	大龍院	南	客殿庫裏間	2514	51.82	50.82
	17	大徳寺	三玄院	東	客殿庫裏間	3651	51.07	124.52 90度回転
	18	大徳寺	總見院	南	客殿庫裏間	4752	74.26	74.66
	19	大徳寺	興臨院	東	庫裏手前	1170	42.34	29.22
	20	妙心寺	金牛院	東	庫裏手前	1374	29.33	54.58
	21	大徳寺	如意庵	東	庫裏手前	2055	65.52	52.24
II 直交型	22	妙心寺	天球院	東	庫裏手前	2618	71.35	58.68
	23	妙心寺	天授院	東	庫裏手前	2845	94.47	43.72
	24	妙心寺	麟祥院	西	庫裏手前	3077	90.38	43.27
	25	大徳寺	真珠庵	西	庫裏手前	3599	54.40	75.51 袋小路
	26	大徳寺	龍翔寺	南	庫裏手前	9833	103.98	115.54 90度回転
	27	大徳寺	瑞峰院	東	庫裏正面	1304	43.02	30.91
	28	大徳寺	徳禪寺	西	庫裏手前	1406	34.55	57.48
	29	妙心寺	桂春院	西	庫裏正面	2067	46.36	53.14
	30	妙心寺	衡梅院	東	庫裏正面	2178	47.33	56.36
III 平行型	31	妙心寺	養源院	西	庫裏正面	2256	57.67	61.50
	32	妙心寺	東海庵	東	客殿庫裏間	1591	35.29	48.59
	33	妙心寺	龍泉庵	西	客殿庫裏間	2445	46.21	64.75
	34	妙心寺	雜華院	西	客殿庫裏間	2538	62.11	70.79
	35	妙心寺	靈雲院	東	客殿庫裏間	2985	55.40	65.57
	36	妙心寺	春光院	東	客殿庫裏間	3047	40.13	82.36
	37	妙心寺	麟華院	西	客殿庫裏間	3490	71.02	61.85
	38	大徳寺	高桐院	東	客殿正面	7582	121.20	86.30
	39	妙心寺	聖沢院	東	客殿正面	2401	60.76	49.61
III 直交型	40	妙心寺	慈雲院	東	客殿正面	2429	77.43	37.92
	41	妙心寺	大雄院	北	庫裏手前	4451	58.60	80.92
	42	大徳寺	孤蓬庵	北	庫裏手前	6334	104.98	70.59
	43	妙心寺	徳雲院	南	客殿手前	2040	56.85	42.46 南北二つのアプローチ
	44	妙心寺	蟠桃院	南	客殿手前	3024	55.57	75.45 アプローチ
						全体平均	3104	63.69 60.98

*アプローチとは、表門からのアプローチの方向を方位で表す。表門位置は図5参照。敷地面積の単位はm²。Lewは東西方向の敷地幅(単位m)。Lsnは南北方向の敷地幅(単位m)。III直交型の徳雲院、蟠桃院は南を主としつつも南北二つのアプローチをもつ。

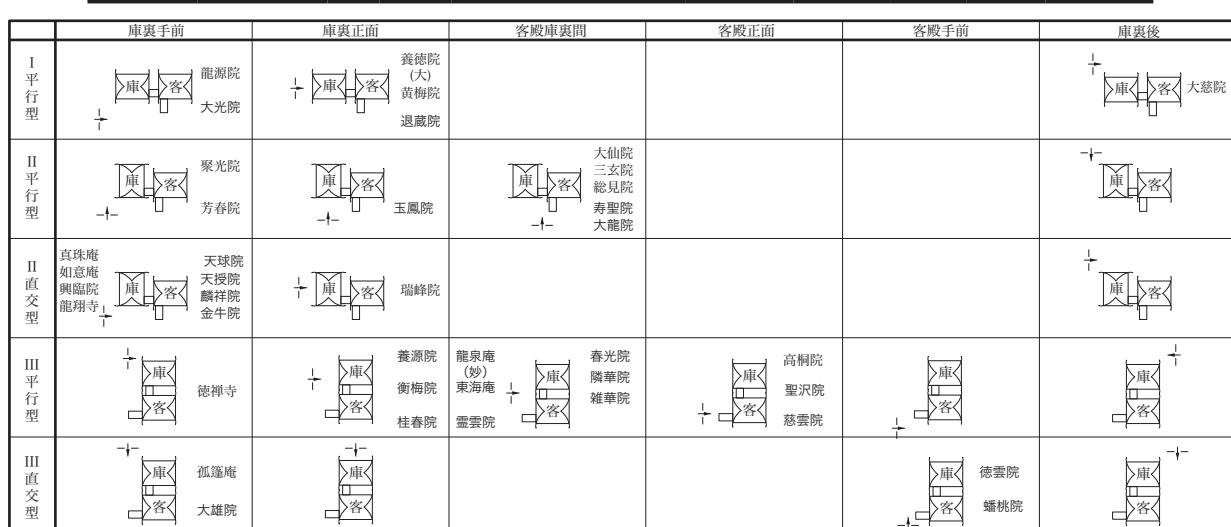


図5 本坊・塔頭配置形式図（明朝：大徳寺、ゴシック：妙心寺）

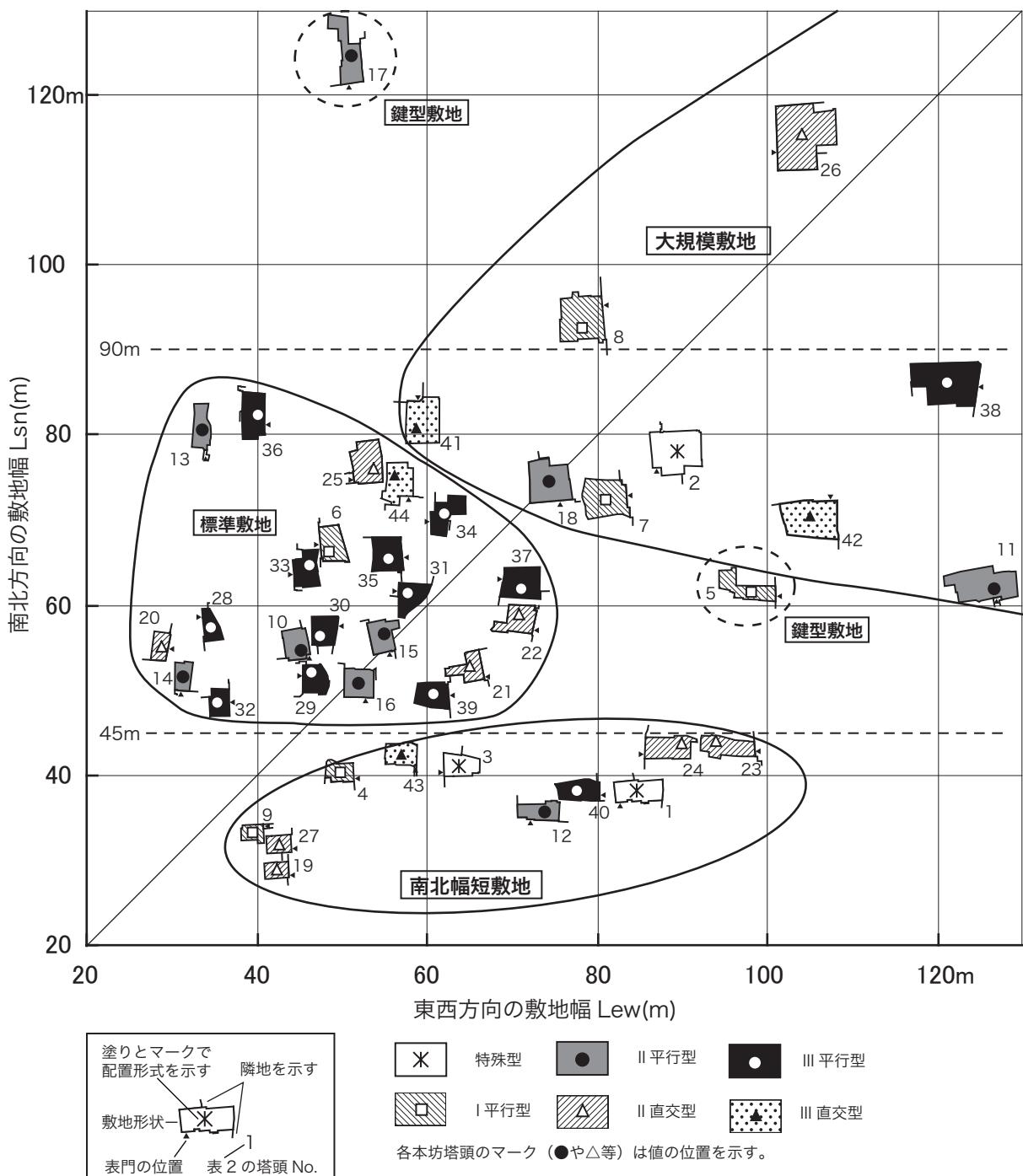


図6 本坊・塔頭の敷地規模・形状と配置形式との関係(散布図)

No.は表2によっている。

4-1. 敷地規模

まず、敷地規模をその面積より分析する。図7は本坊・塔頭の敷地面積をその大きさの順に並べたものである。図中に示す様に小規模敷地($S < 2000 \text{m}^2$)が8、中規模敷地($2000 \leq S < 4000 \text{m}^2$)が27、大規模敷地($4000 \leq S$)が9となった。特に、図6に示す様に 4000m^2 を境にその分布が分かれる。

4-2. 東西方向の敷地幅 L_{ew} と南北方向の敷地幅 L_{sn} の値

図6の分散状況から、 L_{ew} はほぼ連続的に分散し、 L_{sn} は45m、90m付近で区分できる。特に、45m以下の敷地を南北幅短敷地とする。

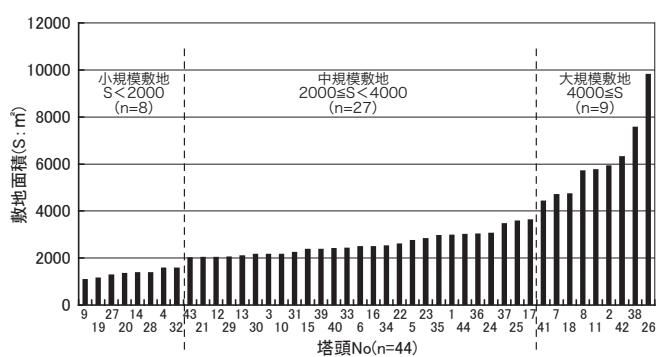


図7 本坊・塔頭の敷地面積

4-3. その他の敷地

No5 大光院と No17 三玄院は敷地形状が鍵型になっており、図6にも示されるように特異な敷地形状である。これを特に鍵型敷地とする。

4-4. 敷地規模・形状と配置形式の関係

これら敷地規模・形状の分析から、図6に示す「南北幅短敷地」「標準敷地」「大規模敷地」「鍵型敷地」の4つの特徴のある敷地群に分けられる。それらと配置形式との関係を表3に示し、以下にその関係についての考察を述べる。

「南北幅短敷地」：敷地面積 4000m²未満、敷地の南北幅が 45m 以下の敷地であり、東西に細長い敷地が多い。配置形式との関係では、I 平行型、II 直交型にのように、アプローチ方向が東西となる配置形式が多くを占める。

「標準型敷地」：敷地面積 4000m²未満、南北方向の敷地幅 (Lsn) が 45～90m、東西方向の敷地幅 (Lew) が 72m 未満の範囲の敷地である。もっとも多くの本坊・塔頭が該当 (22/44)、標準的な敷地であるといえる。配置形式との関係は、II 平行型、II 直交型、III 平行型が多く該当している。

「大規模敷地」：敷地面積 4000m²以上の敷地で、配置形式との関係はみられない。これは、敷地規模が大きいため敷地規模や形状よりもアプローチやその塔頭におけるその他の内的要因によって配置形式が決められていると考えられる。

「鍵型敷地」：敷地奥に向かって鍵型の特殊な敷地形状をしているものである。該当数が少なく (三玄院と大光院のみ)、配置形式との関係は分析できない。

4-5. 本坊・塔頭の配置形式に影響を与える要因

前章の特殊型の特徴とアプローチの位置と配置形式の関係を合わせて、配置形式に影響を与える要因を整理し、表4に示す。

表3 敷地群と配置形式の関係

	特殊型	I 平行型	II 平行型	II 直交型	III 平行型	III 直交型	合計
南北幅短敷地	2	2	1	4	1	1	11
標準型敷地	0	1	5	4	11	1	22
大規模敷地	1	2	2	1	1	2	9
鍵型敷地	0	1	1	0	0	0	2
合計	3	6	9	9	13	4	44

表4 配置形式に影響を与える要因

配置形式	影響を与える要因
特殊型	本坊という内的要因
I 平行型	東西アプローチ。特に顕著な関係はみられないが、比較的正方形に近い敷地でみられる。
II 平行型	南北アプローチ。標準型敷地によくみられる。
II 直交型	東西アプローチ。様々な外的要因(敷地規模・形状)に対応する配置形式
III 平行型	東西アプローチ。標準型敷地によく見られる。
III 直交型	北側アプローチ。敷地規模・形状よりもアプローチの制約が大きい。

5. 前庭の空間構成

前章では、配置形式と外的要因との関係について、特にアプローチとの関係が大きく関係していることが分かった。そこで本章では、両者をより深く探るため、前庭の空間構成を明らかにする。

5-1. 前庭形態と配置形式

各配置形式と前庭形態との関係について述べる(図8)。

前庭の形態はその平面形より「表門からのアプローチの向きに対

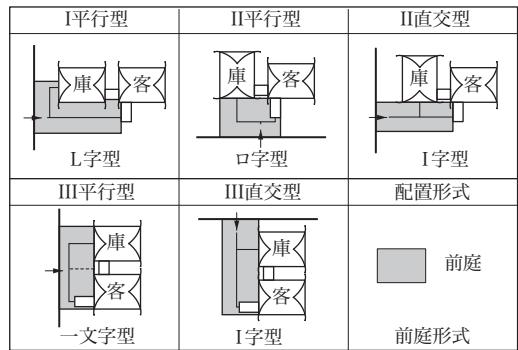


図8 配置形式と前庭形態

表5 分析対象本坊・塔頭一覧

配置形式の類型	対象本坊・塔頭
I 平行型	龍源院 **、黄梅院 **、退藏院 *
II 平行型	大仙院 *、芳春院 *
II 直交型	真珠庵 *
III 平行型	東海庵 *、靈雲院 ***、春光院 ***
III 直交型	孤篷庵 *

* 分析で用いた 1/200 平面図は以下の図面を元に観察調査等によって位置図修正し、トレースして作成した。
** 西沢文隆実測図¹⁴⁾¹⁵⁾ *** 実測図日本の名園¹⁷⁾

*** 西沢文隆小論集2庭園論 II 日本文化の中¹¹⁾

して奥行きがあるものを I 字型」「同じく門からのアプローチの向きに対して横幅があるものを一字型」「前庭の平面形がほぼ正方形であるものを口字型」「前庭の平面形が L 字型であるものを L 字型」として4種類に分けられる。

この分類と配置形式の対応関係は「I 平行型は L 字型に」「II 平行型は口字型に」「II 直交型、III 直交型は I 字型に」「III 平行型は一字型に」となる。

5-2. 前庭の空間構成の分析

本坊塔頭の 6 類型から、前庭との関係が明らかな 10 塔頭を対象(表5)にその前庭の空間構成を明らかにする。

これらの 10 の本坊・塔頭について 1/200 の平面図より、客殿と庫裏の配置構成との関係、建築や塀による囲まれ方から分析を行う。

前庭は「塀で空間を仕切る」ことで囲われた外部空間となっている。前庭を囲っている空間を仕切る塀には、図9のように「(1)方丈・客殿と前庭を仕切る」「(2)中庭、茶堂・客寮と前庭を仕切る」「(3)サービスヤードと前庭を仕切る」の三つの働きがある。そして、その三つの塀は図10のように外部空間、建築(庫裏)の内部空間、建築間に延長され、それらを縫うように敷地全体を仕切っている。この仕切りを図10中の凡例のように①②③と名付ける。

この①②③の塀による働きを模式図に表した(図11)。その①②③は前庭を形作る際に庫裏、玄関という建築に接続される。その接続のされ方に着目し、「玄関の空間」、「庫裏の空間」として図化した(図11)。これをもとに前庭の空間構成について以下の様に考察した。

前庭の空間は(1)(2)(3)の塀、①②③の仕切りによって、表門では①と③の仕切る働きがここで凝縮されて、敷地の内外を仕切る結界、中庭は方丈・客殿と庫裏に挟まれて聖と俗を仕切る結界となっている。図12のように表門を「凝縮された結界」、対して中庭を「弛められた結界」、前庭は敷地の内外を結界する「厚みのある結界」と名付け、これを「結界の二重構造」という。

(1)(2)(3)の塀が建築(玄関、庫裏、表門)のどこに接続されて空間

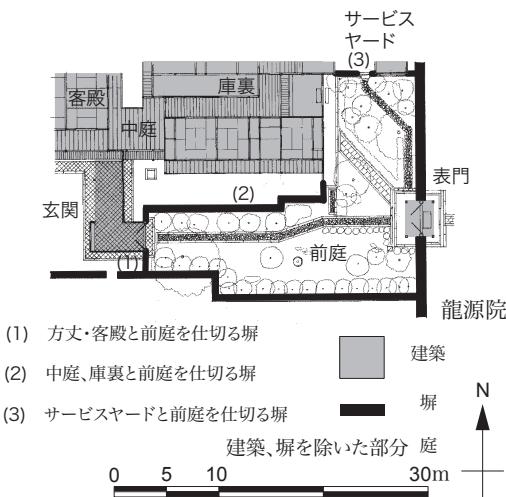


図9 空間を仕切る扉の分析図（龍源院）

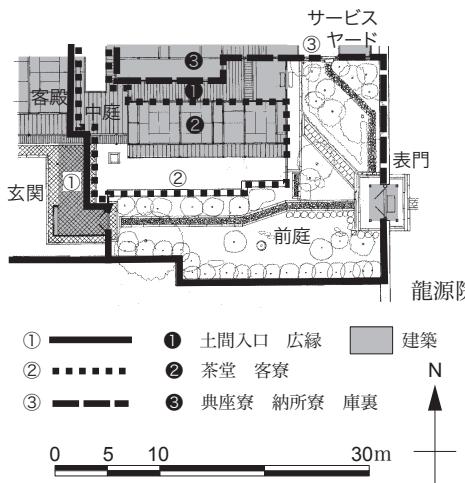


図 10 空間を仕切りの働き (龍源院)

を仕切っているかについて説明していく。

「表門」は(1)(2)(3)の扉が直接接続されないが、その延長である①と③の仕切りが左右に接続されている。

「玄関」は(1)(2)の扉が接続され、その接続のされ方で「出ている」玄関、「引いている」玄関、中間的な玄関と三つに分類される。この扉の接続のされ方によって玄関の見え方が異なり、扉の接続のされ方は玄関をプレゼンテーションする手法であると言える。その手法は「玄関を出す 出たプレゼンテーション」「玄関を引く 引いたプレゼンテーション」「両者を使う 中間のプレゼンテーション」の三つとなる。

「庫裏」は(2)(3)の扉が接続され、玄関と同じようにその接続のされ方によって庫裏の見え方が異なり、扉の接続のされ方は庫裏をプレゼンテーションする手法であると言える。その手法は「庫裏の出隠をつくる 出たプレゼンテーション」「庫裏のファサードを切る

「引いたプレゼンテーション」、「庫裏のファサードを奥まらせる
引いたプレゼンテーション」、「庫裏のファサードを全面見せる 中
間のプレゼンテーション」がある。

堀の仕切りと結界、プレゼンテーションの手法との関係、玄関のプレゼンテーションの手法と庫裏のプレゼンテーションの手法の組み合わせを考えて、それぞれの前庭がどのように開かれて、その形

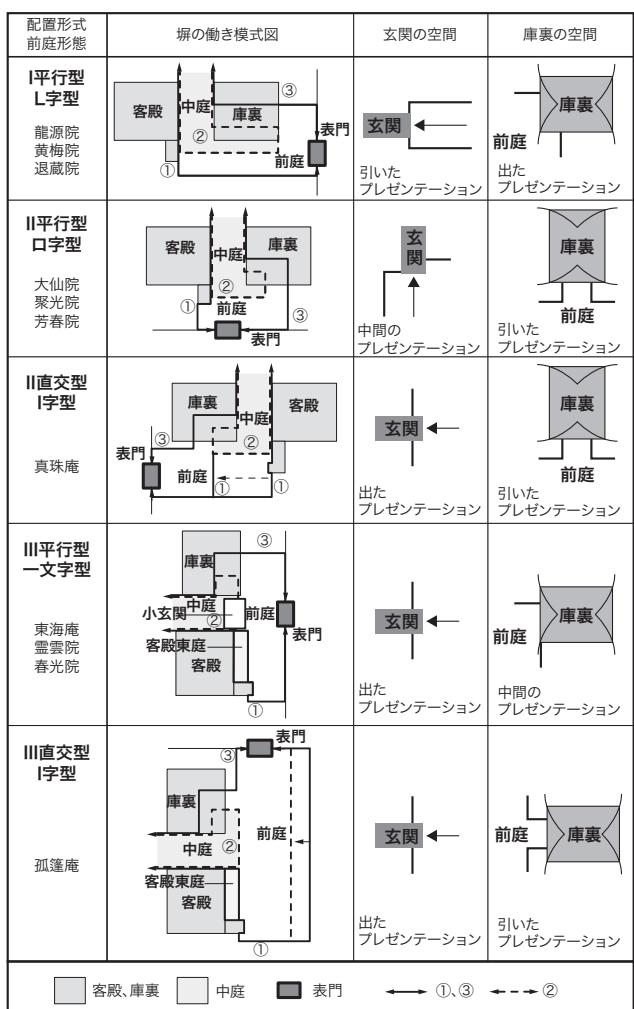


図 11 塙の働き模式図

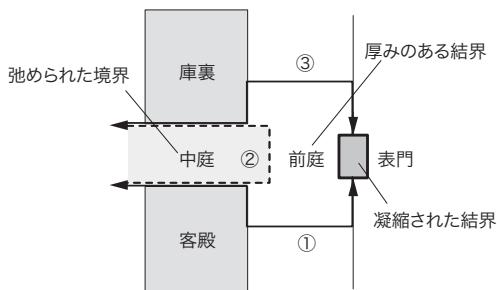


図 12 結界の二重構造

態が形づくられているかを各配置形式の類型毎にその特徴を述べていく。

I 平行型の龍源院、黄梅院、退藏院は前庭の形態がL字型、玄関のプレゼンテーションが引いたものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは出たものになっている。

II 直交型と III 直交型の真珠庵と孤篷庵は前庭の形態が I 字型、玄関のプレゼンテーションが出たものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは引いたものになっている。

II 平行型の大仙院、芳春院は前庭の形態が口字型、玄関のプレゼンテーションは中間のプレゼンテーションであり、庫裏のプレゼンテーションは引いたものになっている。

III 平行型の衡梅院 東海庵 靈雲院 春光院は前庭の形態が一

文字型、玄関のプレゼンテーションが出たものであるのに対して、庫裏のプレゼンテーションは中間のものになっている。

このように前庭は大きくは建築で囲まれているが、最終的にその平面を整えているのは外部空間を仕切る堀であり、その堀の働き、建築との関わりによって「結界の場としての前庭」「プレゼンテーションの場としての前庭」となるのである。

これは、外的要因であるアプローチ、敷地規模・規模、内的要因である建築（平面や配置形式）という二つの要因を前庭が空間的に関係づけとりまとめていると考えられる。

6. 本坊・塔頭の配置構成

本章では6類型それぞれの代表的な本坊・塔頭について、その配置平面図をもとに、その配置構成を明らかにする。対象は、「特殊型」の大徳寺本坊、「I 平行型」の龍源院、「II 平行型」の大仙院、「II 直交型」の真珠庵、「III 平行型」の靈雲院、「III 直交型」の孤蓬庵である。

分析対象となる配置平面図は、重森三玲、西澤文隆によって作成された実測図を使用している^{注10)}。

分析方法は以下である。

- ①1/500の配置平面図上で、「仕切り」によって、建築と庭もしくは庭のみでなる各構成要素の範囲を区切った図を作成する（図13）。
- ②その図を用い、各構成要素、「仕切り」、配置構成の3点について分析考察を行う。

6-1. 「仕切り」による構成要素

前章前庭の空間構成で述べた様に、建築の外壁や内壁、襖や板戸等の建具、堀や生垣によって、建築の内外によらず連続した線がつくれ、空間を仕切っている。この「仕切り」により、対象本坊・

塔頭の1/500配置平面図を読み取り、分析方法①に示す図を作成した（図13）。この結果、「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」の6つの各要素により本坊・塔頭が構成されていることが分かった。

6-2. 各構成要素の特徴

建築と庭の関係に着目し、6つの構成要素「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」それぞれの特徴について分析考察する。

- ①客殿：庫裏、中庭や書院との関係により、主に三方向の庭をもつ。南庭と東西北のうち2つの庭である。それぞれ連続感をもちつつ、板戸や縁石、樹木などにより完全ではなく区切られている。建築と庭が建築と堀による一つの連続するまとまりをもった空間となっている（庭が連続して展開する）。
- ②庫裏：庫裏の一部（典座寮、納所寮、庫裏（狭義））と蔵などの諸建築、それらを繋ぐ縁や渡り廊下、その間の庭からなる。庭とそれを取り囲む諸建築によるまとまりである。
- ③中庭：客殿と庫裏の間に位置し、渡り廊下、縁、庭と庫裏の一部（茶堂、客寮）からなる。渡り廊下と縁で庭を囲む、臨むまとまりである。
- ④書院：建築とその堀や生垣で囲まれた庭や客殿や庫裏と共有する庭からなる。客殿と庫裏の間の位置にある。建築と連続する庭からなるまとまりである。
- ⑤前庭：庫裏、客殿（玄関）、中庭と敷地境界の堀により囲まれた庭である。
- ⑥墓地・菜園・樹林：客殿、庫裏、書院、前庭の外側、敷地境界に沿って位置するオープンスペースによる庭である。

6-3. 6つのまとまりによる配置構成の特徴

6類型を代表する6つの本坊塔頭について、6つのまとまりによる配置構成についてその特徴を記していく。

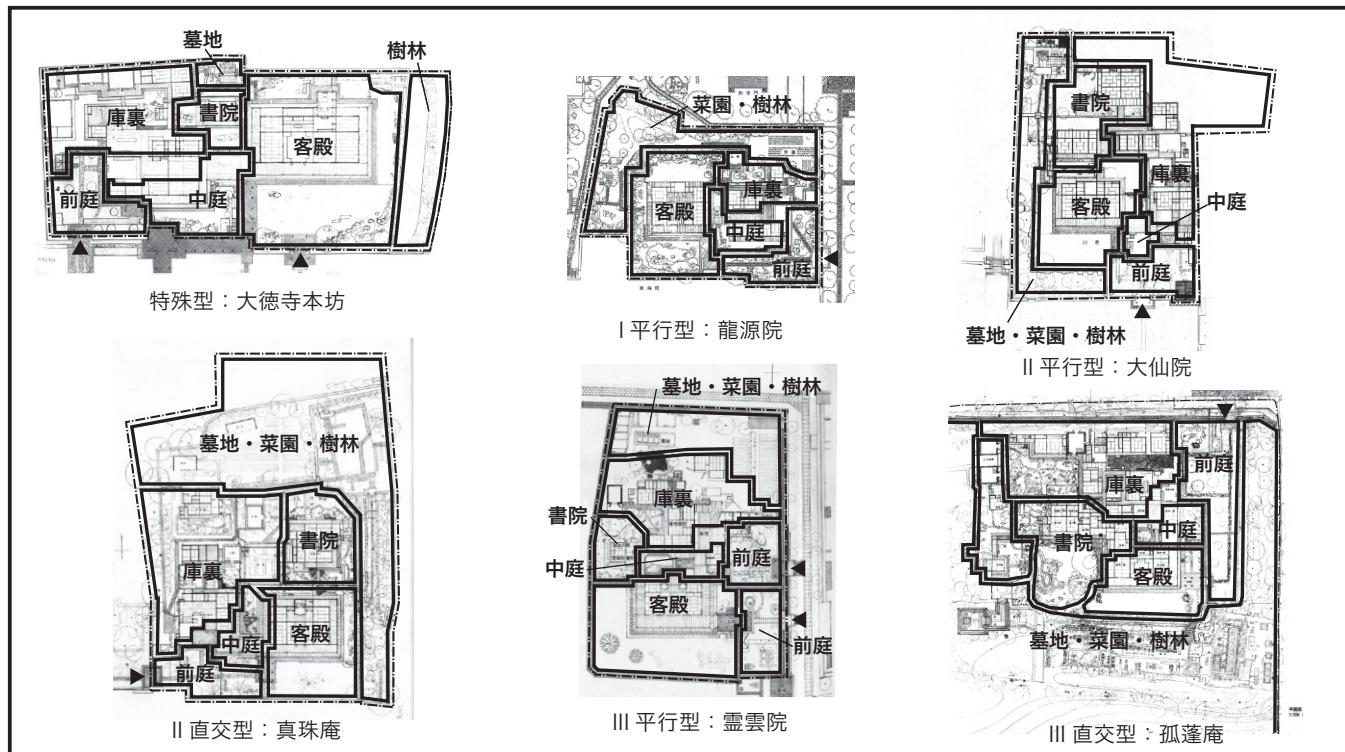


図13 本坊・塔頭の配置構成

- ・大徳寺本坊（特殊型）：東西に客殿と庫裏のまとまりが並び、その間に中庭と書院が位置し、その外側西に前庭、東に樹林がある。本坊であるため、玄関が直接伽藍に開いているため、他の塔頭とはことなり、前庭は庫裏と中庭と囲まれた庭となっている。
- ・龍源院（I 平行型）：書院ではなく、客殿、庫裏、中庭、前庭、再建・樹林の5つのまとまりから成っている。東西に客殿と庫裏が並び、中庭が間に位置する。前庭は客殿、庫裏、中庭に接して位置している。敷地北から西にかけて菜園・樹林・墓地が巡っている。
- ・大仙院（II 平行型）：東西に客殿・庫裏が並び、間に中庭が位置する。客殿の四周に庭があり、客殿北庭は書院と共有している。前庭は客殿、庫裏、中庭に接して位置している。敷地南から西にかけて墓地・樹林が囲っている。
- ・真珠庵（II 直交型）：東西に客殿と庫裏が並び、中庭がその間に位置する。書院は客殿北側に、前庭は客殿、庫裏、中庭に接している。これらの外側の東から北側にかけて墓地・菜園・樹林が取り囲んでいる。
- ・靈雲院（III 平行型）：南北に客殿と庫裏が並び、その間に中庭が位置する。書院は敷地西側、客殿、庫裏、中庭に面し、反対の東側に前庭が位置する。敷地北から北東に墓地・菜園が位置する。
- ・孤蓬庵（III 直交型）：南北に客殿と庫裏が並び、その間に中庭が位置する。中庭の東に前庭、西に書院が位置する。東、南、西の三方向を墓地・樹林が取り囲む。

これらをまとめると、図14のように二つの配置構成があることがわかる。それは客殿と庫裏が東西に並ぶタイプと南北に並ぶタイプである。東西に並ぶものは、特殊型（大徳寺本坊）、I 平行型（龍源院）、II 平行型（大仙院）、II 直交型（真珠庵）の4類型、南北に並ぶものは、III 平行型（靈雲院）、III 直交型（孤蓬庵）の2類型である。

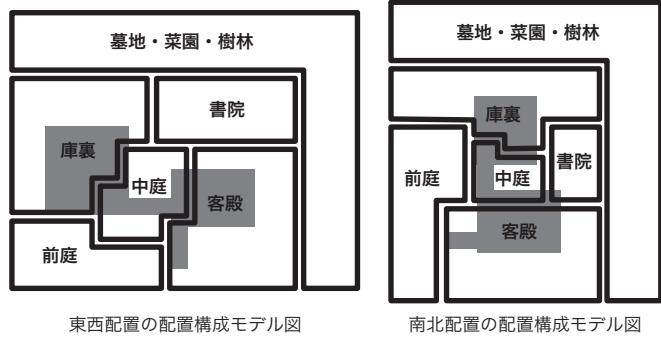


図14 本坊・塔頭の配置構成モデル図

また、以下の点で全類型を通じて共通していることが分かった。

①中庭を中心に各構成要素が配されている

中庭を中心に客殿、前庭、庫裏、書院がその順で周囲を取り囲み、本坊・塔頭の主要な建築と庭の群を形成していることである。その外側に、墓地・菜園・樹林というオープンスペースのみの庭が取り囲む。

②外側にある墓地・菜園・樹林

墓地・菜園・樹林は、他の本坊塔頭との隣地境界ではなく、境内の街路もしくは境内外側との敷地境界側にある。

③堀、壁、建具、生垣による「仕切り」によって、建築と庭による

まとまりのある構成要素がかたちづくられている。

④トポロジカルな配置構成

客殿と庫裏を中心に各建築が配置され、それに伴う庭により敷地内の配置が構成されている。客殿は四周に庭をまとい、堀や生垣によって、庫裏は周囲に建築が配置され、その間の庭によってまとまりがつくられている。これは、建築と庭による各空間をトポロジカルに配置するものである。

このように、本坊・塔頭の配置構成は、敷地がもつ敷地規模や形状、接道等のアプローチといったそれぞれに異なる外的要因をもちらがらも、建築そのものの機能や役割等に基づく平面や配置といった内的要因を満たす同質のトポロジカルな配置構成となっていると考えられる。

7.まとめ

以上より、得られた知見をまとめると。

- (1) 前庭は客殿と庫裏、表門及び堀により囲まれ、本坊・塔頭の配置形式に応じた形となっている。前庭と街路・客殿の四周の庭・渡廊下と連続する中庭・庫裏に接続する庭（サービスヤード）をそれぞれ仕切る4つの堀（空間を仕切る堀）により囲まれ、その空間構成を特徴づけられて、堀で空間を仕切っていくことで前庭がかたちづくられている。その堀が建築内部の壁や建具へと連続していくことで、建築の内部と外部の庭がひとまとまりの空間となり、建築と庭でつくられる配置の基本要素となる。また、空間を仕切る堀により特徴づけられた玄関の空間と庫裏の空間の相互関係によって前庭がかたちづくられている。
- (2) 本坊・塔頭は、囲われた庭である前庭、四周に広がる庭を含む客殿、機能的な庭と共にある庫裏、建築と庭の間を縫う広縁・渡廊下、それらを囲む屋外空間（樹林、墓、菜園）と堀からなり、その要素は「客殿」「庫裏」「中庭」「書院」「前庭」「墓地・菜園・樹林」の6つである。それらは、①中庭を中心に各構成要素が配されている。②外側にある墓地・菜園・樹林により囲われる。③堀、壁、建具、生垣による「仕切り」によって、建築と庭によるまとまりのある構成要素がかたちづくられている。④各要素がトポロジカル配置構成となっている。の4点の特徴がある。
- (3) 敷地の配置構成は、そのトポロジカルな構成により、外的要因と内的要因の二つの要因を、上記(1)(2)で述べた庭によって空間的に関連づけ、取りまとめている。

以上により、本研究は建築的に限定されたまとまりのある外部空間の構成に対する意匠的研究として、現代建築の設計への応用も可能な知見であると考えられる。

謝辞

大徳寺・妙心寺の本坊・塔頭の方々には、本研究の調査にご協力頂きました。澤良雄氏（アトリエサワ主宰）から快く西澤文隆氏の実測図を閲覧及び複写のご許可を頂きました。本稿の執筆にあたり重村力教授（神奈川大学）、山崎寿一准教授（神戸大学）には、貴重なご指導・ご助言を頂きました。

ここに記して深く謝意を表します。

注

- 注 1) リンチについては参考文献 5)、陣内については参考文献 6) を引用参考している。
- 注 2) 日本建築史では川上貢の研究（参考文献 7）、日本庭園史では重森三玲の研究（参考文献 16）等が著名である。
- 注 3) 参考文献 11) ～ 15)。
- 注 4) 参考文献 7) 13) による。
- 注 5) 川上貢（参考文献 8）によると、「塔頭は本来高僧の塔所（墓所）を意味し、高僧の遺体または遺骨を埋葬した塔を中心に、門弟子によって生存時と同様に朝夕の供膳・諷経を行う施設すなわち亭堂または昭堂を塔前に設け、守塔者のための居所が付属していた。」が、「門派の成立とその発展によって門派の私的所有物に化し、（中略）門派の拠所として門弟子の育成の場になり、そして門徒内の師弟関係を通じて相承されるものになった。」とあり、高僧やその門弟子達の居住空間としての性格も強くあるのである。
- 注 6) 参考文献 7) ～ 11)、13) による。
- 注 7) 三玄院、龍翔寺は、客殿が東面しているため、90 度時計回りに回転した配置で扱う。
- 注 8) 計測方法は、1/2500 白地図を CAD ソフト上でトレースし、その敷地の形状の CAD ソフト上での面積計測、距離計測の値による。表門のある敷地境界を基準に、敷地の東西方向の最大距離を Lew（東西方向の敷地幅、横軸）、同じく南北方向を Lsn（南北方向の敷地幅、縦軸）とし、その値により散布図を作成した。
- 注 9) 用いた実測図は表 5 参照。
- 注 10) 大徳寺本坊、真珠庵、大仙院、靈雲院、孤蓬庵については西沢文隆の実測図（参考文献 11) 14) 15)）を、龍源院については、重森三玲の実測図（参考文献 17)）を用いた。

参考文献

- 1) 今和次郎：日本の民家、岩波書店、pp.90 ～ 109、1989（初出「日本の民家」鈴木書店 1922 年）

- 2) 重村力：建築のデザインと都市環境の回復、「日本建築学会叢書 1 都市建築の発展と制御シリーズ I 都市建築のビジョン」、日本建築学会、pp.180 ～ 202、2006
- 3) 重村力：都市建築のコンテクストとプロトコルについて、「安全と共生の都市空間セミナー実施報告 No.5 2006 年前期」、神戸大学 COE 「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」、pp.383 ～ 431、2006
- 4) 山田圭二郎：間と景観、技法堂出版、2008
- 5) ケヴィン・リンチ：[新版] 敷地計画の技法、鹿島出版会、p.5、1988
- 6) 陣内秀信：東京の空間人類学、筑摩書房、1992
- 7) 川上貢：禅院の建築、河原書店、1968
- 8) 川上貢：大徳寺の建築、玉村竹二編「秘宝 11 大徳寺」、pp.172 ～ 181、講談社、1968
- 9) 川上貢：妙心寺の寺域景観と建築、宮次男編「日本古美術全集 24 妙心寺」、pp.90 ～ 97、集英社、1982
- 10) 竹貫元勝：諸堂伽藍と山内頭塔及び龍安寺、荻須純道編「妙心寺」、pp.147 ～ 239、東洋文化社、1977
- 11) 西沢文隆：西沢文隆小論集 2-4 庭園論 I 人と庭と建築の間、II 日本文化の中で、III 続・日本文化の中で、相模書房、1975-76
- 12) 西沢文隆：西沢文隆の仕事（一）透ける、鹿島出版会、1988
- 13) 西澤文隆：伝統の合理主義、丸善、pp.6 ～ 35、1981
- 14) 西沢文隆：建築と庭 西澤文隆「実測図」集、西澤文隆「実測図」集刊行委員会、建築資料研究社、1997
- 15) 西澤文隆：西沢文隆実測図集刊行会：日本の建築と庭—西沢文隆実測図集、中央公論美術出版、2006
- 16) 重森三玲：日本庭園史体系全 35 卷、社会思想社、1971 ～ 76
- 17) 重森三玲、完途：実測図日本の名園、誠文堂新光社、1971 ～ 1976
- 18) 都市デザイン研究体：日本の都市空間、彰国社、1968
- 19) 川崎清、小林正美、大森正夫：仕組まれた意匠、鹿島出版会、1991

（2009 年 9 月 29 日原稿受理、2010 年 4 月 20 日採用決定）